

かごしまの景観

「未来のかごしまを想像してみよう」



かごしまの特色を生かした景観づくりをめざす 「鹿児島県景観条例」を作りました

条例では、住民・行政・民間、それぞれの役割を示しています。

- 県民** 清掃・美化活動など、身近なことから景観づくりに努めましょう。
- 事業者** 地域の景観に配慮した建築物の工事や土地の利用に努めましょう。
- 市町村** 地域の特色を生かした景観づくりの計画を定め、規制や誘導を行います。
- 県** 景観づくりの必要性が広く伝わるように努め、必要な支援を行います。

かごしまの美しい風景は、そこに暮らす人々に潤いや活力を与えます。また、観光客の方々にかごしまを視覚的にアピールし、感動させることができる大切な観光資源でもあります。

しかしながら、近年の都市化の進展や過疎化、少子高齢化などにより、かごしまの大切な資源である景観が荒廃し、消えていく地域もあります。

このような中、県では、県内のすばらしい景観を「県民共通の資産」として「守る」「育てる」「創る」ことを目指そうと「鹿児島県景観条例」を作りました。

今回の特集では、景観の重要性について考え、そして、かごしまの美しい景観の一部を紹介します。



木組みの街並み(フランスの都市ルーアン)を視察する知事。

かごしま都市デザイン会議

かごしまらしい都市づくりを目指して



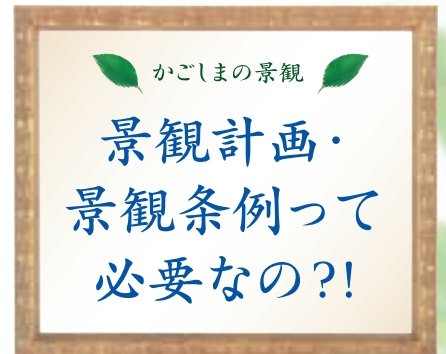
50年後の将来を見通した都市景観とまちづくりのあり方について話し合われました。会議でまとまった7つの提言を、3月下旬に県知事や鹿児島市長に提出し、今後の都市づくりに反映させていきます。

7つの提言

- 1 桜島・錦江湾などを生かした都市景観の形成
- 2 美しくつるおいのあるまちなみ景観の形成
- 3 かごしまらしい地形や自然を生かした景観の形成
- 4 かごしまらしい歴史・文化の継承
- 5 公共の事業と連携した景観の形成
- 6 良好な景観形成を図るための共通意識づくり
- 7 美しいまちづくりを実現するための仕組みづくり



城山展望台からの眺め。



錦江（鹿児島）湾の真ん中に、ずっと浮かんで見える桜島。これは、鹿児島市の城山展望台からの眺めだ。毎年、多くの観光客が足を運ぶ。

もしこの眺めをささぎってしまう高層ビルが建ったらどうだろう。とてももったいないと感じるのは、あなただけではいはず。

この景観を守ってくれるのが、鹿児島市景観計画と景観条例だ。景観法に基づくこれらの制度によって、城山展望台からの桜島の眺めと桜島フェリーからの城山の眺めをささぎらないように、建築を規制することができる。

規制と大きく、不自由を強いられるように思うが、こういった、美しい景観を守るための規制であれば、受け入れる気持ちになる人も多いことだろう。このような認識が鹿児島市民、そして鹿児島県民に広まっていき、景色も誇れるかごしまづくりにみんなを取り組んでいきたい。



都市部に広がる斜面緑地はめずらしい景観であるため、規制の対象となった。



景観は行政だけで決めてはいけないという気持ちから、まちづくり会議に参加しました。景観はみんなの共通の資産ですので、市民、事業者、行政が一緒になって作り上げていくものだと思います。

私も含め、参加メンバーはみんな、自分が住んでいる市に愛着や思いがありました。数回のワークショップを経て、桜島・錦江湾・緑の稜線などをはじめとした、すばらしい景観資源を大切に守っていかねばならないと改めて実感しました。

景観計画や景観条例を作る前の確認作業に加われたことは良かったと思います。景観に対する意識が、多くの人に浸透していけばいいですね。

* 鹿児島市が景観計画や景観条例を作る前に、市民の意見を聞くために行った研究会。

かごしま市景観づくり会議メンバー*

一級建築士

武田 敏郎 さん
たけだ としろう



竹は1年に15m伸びる。それだけに、管理も大変だ。



箱川さんたちの手で整備された竹林。神社が目立つようになり、参拝者も増えたそう。



「竹林の整備にとどまらず、竹産業の復活を目指したいんですよ」と語る箱川さん。

守 守る・保全する景観

鹿児島県の竹林面積は日本一。たけのこを採ったり、竹製品に加工したりと、特にかごしまでは竹や竹林に慣れ親しんできた。

「かぐや姫の時代はもちろんのこと、私が小さいころまでは、山へ焚き物を取りに行き、川で洗濯をしたり、遊んだりしたものでした。山や川に行く機会が減り、山は荒れ、川は汚れるようになりました」と語るのは、NPO法人九州エコ・グリーンヘルパー代表の箱川 政己さん。箱川さんたちは、NPOのメンバーとともに、竹林の整備に励んでいる。

高齢化により山を管理する者がいなくなつたことが荒廃竹林増加の一番の原因だからだ。

「里山の景観」を守っていききたいというのが、みんなの思い。今後、多くの団塊の世代が観光で訪れ、なつかしい思いに浸りながら、竹林の中を散策してもらえないのではないかと箱川さん。

きれいに整えられた竹林を見て、周辺の住民から、「うちの竹林もきれいにしてほしい」と依頼が入ることが増えたという。みんなの意識の高まりも徐々に感じられるようだ。

昔から、そこにあつた自然の景観。そこにあつて当たり前という時代ではない。壊されないように大切に守つていかねばならない。



育 育てる・修復する景観

奄美大島の東隣、喜界島は島の大半が隆起サンゴ礁である。

台風の影響が多い島であるが、壊れやすい茅葺きの家屋を台風から守つてくれていたのが、サンゴを積み上げた石垣だ。阿伝地区では昔ながらの石垣が保存され、喜界島らしい風景を目にすることが出来る。

じょうに道が緩やかにカーブしていたり、緑の芝生が植えられていたり、ゆつたりとした空気を感じられる。大きなものに包まれているようだ。喜界島らしい景観が、新しい団地にも育てられていた。

育てる景観であるが故に、育てていく私たちの愛情の多少で景観は変わっていくであろう。みんなでは景観という財産を育てていかねばならない。

公営住宅団地のコーラル喜界は50世帯が住む。その団地の石垣も、サンゴが使われている。喜界島の材料を使い、喜界島の風土を大切にしたいという考えからそうになったという。団地内は、阿伝地区と同じ。

コーラル喜界居住者

服部 美津代さん



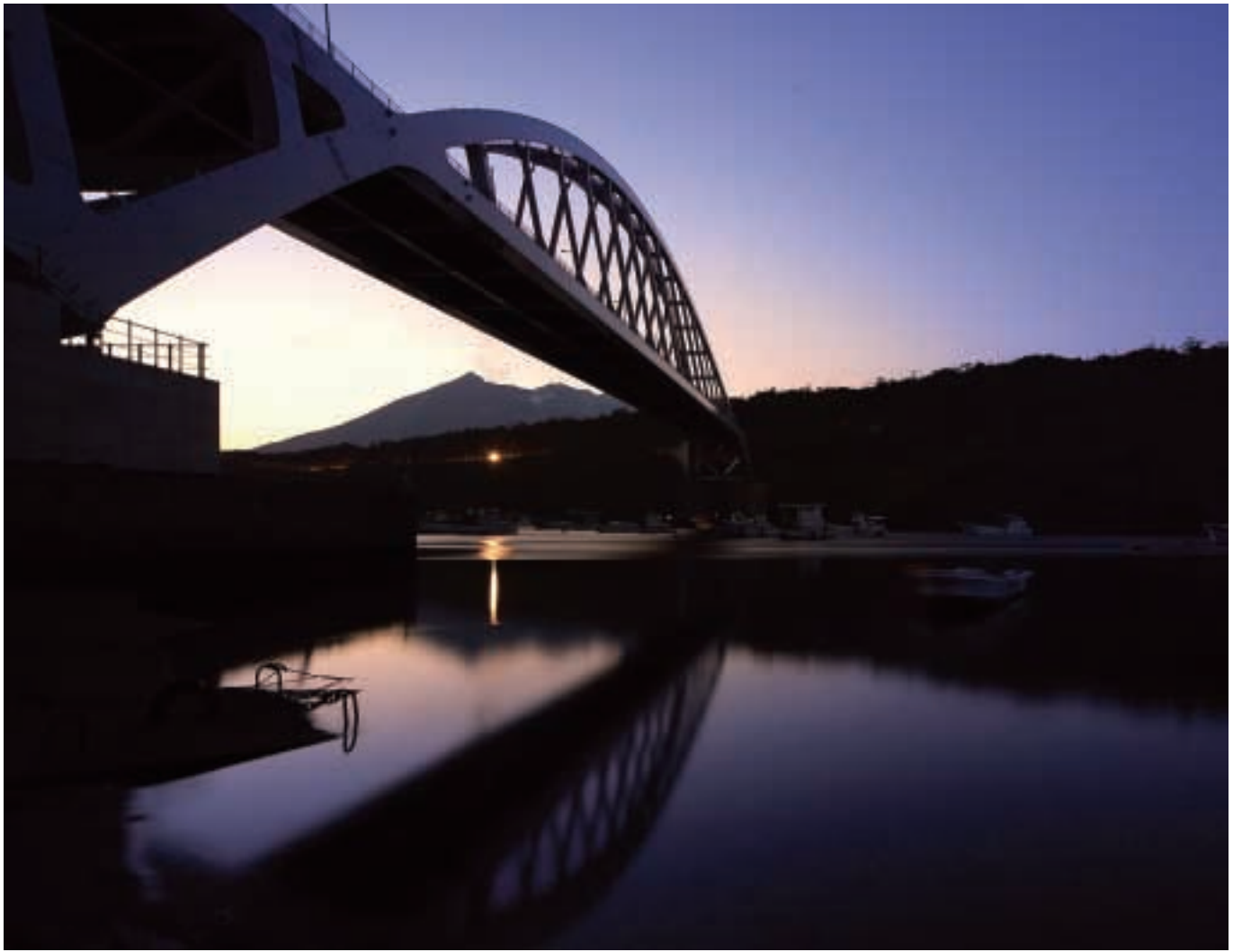
20年くらい三重県に住んでいて、喜界島にはUターンしてきました。この団地に住んで6年になりますが、この団地を気に入っています。

サンゴの石垣は喜界島っぽくていいですし、地元にあるものを生かすことは大切だと思います。

港が見える場所でもあるので、気持ちよく生活できています。観光地だけじゃなくて、生活する場から目にする景色や景観も大切なんだなと感じますね。



阿伝地区の石垣。ひとつひとつ積み上げていった当時のしのぼれる。



中央アーチの長さが260mのバランスドアーチ。橋のたたまいに圧倒されそうになる。

創 創る・創造する景観

垂水市牛根麓地区は、大雨のたびに国道220号が通行止めとなり、地域住民は不自由を強いられていた。昨年8月、国土交通省大隅河川国道事務所が行う防災事業の一環として、桜島と垂水市牛根麓地区とを結ぶ牛根大橋が架けられた。

橋を架ける際に、周辺の環境を害することなく、周りにとけこむような橋のデザインのものとした。これが「創る景観」だ。

桜島は霧島屋久国立公園の一部。公園内にあるコンビニエンスストアの看板の色が溶岩の色に合わせ

牛根漁業協同組合

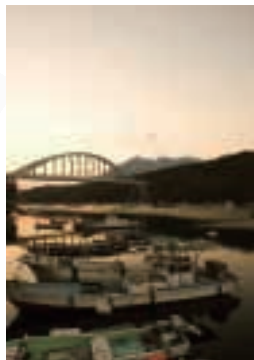
田村眞一さん



牛根地区のみんなが待ち望んだ橋が架かってうれしいですね。

橋の美しさにほれほれますよ。橋の姿と桜島の姿がいい具合にマッチしてますよね。アーチ型の橋としては、日本で3番目の長さを持つ橋だそうですし、牛根の名物になってくれそうです。

牛根のことが伝わって、牛根漁協の養殖ぶり「ぶり大将」のよいアピールにもなりそうです。いいことづくしです。



およそ300隻の船が橋の下を行き交う。

て茶色にしていることがよく話題となるが、橋の色も、環境省に相談して周囲となじむ色にしたという。生活する上で、道路や橋などの人工造物は必要不可欠。そうであるが故に、新たなものをつくる際は、景観のことも考えながら、デザインを考え、周りの風景との調和をとっていくことが必要だ。そこが将来、かしまを代表する観光スポットとなる可能性もありえるのだから。